

麻酔科・ペインクリニック

■ スタッフ

科長		丸山 一男
副科長		横地 歩
医師等の数	常 勤	4 名
	併 任	1 名
	非常勤	1 名
	鍼灸師	3 名
	臨床心理士	1 名

■ 診療科の特色・診療対象疾患

1. 特色

1) 統合医学的アプローチ

当外来には、ペインクリニック外来、漢方外来、鍼灸外来、緩和外来、慢性疼痛心理外来が、併設されています。慢性疼痛、運動器疼痛、癌性疼痛といった、難治性を含む種々の疼痛の治療を行うとともに、広範囲の様々な身体症状や精神症状に対し、統合医学的アプローチを視野に入れた診療をおこないます。

2. 主な診療対象疾患

1) 帯状疱疹後神経痛

薬物療法が主体となりますが、局所麻酔薬によるブロック注射にも、一定の役割があります。

2) 神経障害性疼痛

有痛性糖尿病性神経障害、絞扼性末梢神経障害、脳卒中後痛、脊髄障害性痛、幻肢痛、腕神経叢引き抜き損傷後痛、CRPSなどがあります。様々なアプローチを併用します。

3) 筋・筋膜性痛症候群

骨格筋・筋膜が、持続的緊張・収縮によって局所循環不全をきたすと、その部位に発痛物質が蓄積し痛みとなります。痛み刺激が脊髄に入ると、反射的に運動神経や交感神経を興奮させるので、筋収縮や血管収縮、局所循環不全がさらに悪化します。この痛みの悪循環路が病態と考えられています。原因となっている基礎疾患の検討も重要です。

4) がん性疼痛

治療はWHO方式がん疼痛治療法から開始します。適用があれば、ブロックもします。癌が原因ではない痛みも併存していますので、痛みの原因にかなっ

た治療を選択します。患者と家族をとりまく多岐にわたる問題を視野に入れ、関連各部門と連携する多職種間の連携を重視しています。

5) 顔面・頭部の痛み

多様な疾患の痛みが考えられます。それぞれに応じた治療を行います。痛み以外でも、三叉神経麻痺、突発性難聴、アレルギー性鼻炎等については、星状神経節への働きかけが有効です。

6) 胸・腹部の疾患、頸・肩・四肢の痛み

腹部内臓の痛みは、体幹に現れることがあり、同部の筋肉痛に対する治療で改善することがあります。会陰部痛、外傷性頸部症候群、頸肩腕症候群、肩関節周囲炎、坐骨神経痛、変形性膝関節症、四肢の血行障害の痛み等、様々な疼痛に、ブロックや、薬物療法等を行っています。

7) 脊椎疾患

多種多様な疾患があります。整形外科をはじめ、関係部門と連携した病状把握が大切です。ブロック、理学療法、薬物療法等を併用しています。

8) 漢方外来の対象疾患・対象症状

器質的疾患から機能的疾患まで、あらゆる症状が対象です。特に西洋医学的にはっきりとした診断がついていない、機能的症状について高い効果をもたらすことがあるのが特徴です。従って治療法が確立されていない症状や、なんとなく調子が悪いといった、あいまいな状態でも、その体質の偏りを伝統医学的な見地から判断し、そのゆがみを治していくといった、局所ではなく全身に働きかける治療が行えます。また、西洋医学的にすでに治療が行われているにもかかわらず、十分な効果を認めない場合や、その副作用などで治療に制限が出る場合などでも、漢方薬を併用することでさらに治療効果が高まることもしばしば見受けられます。生後間もない赤ちゃんから、積極的な治療のはばかりされる高齢者の方まで、幅広い年齢層の方が対象となります。

9) 鍼灸外来の対象疾患・対象症状

対象は多岐にわたります。肩こり、腰痛、膝痛、その他の関節痛の痛みやしびれの他、だるさ、不眠、冷え、食欲不振といった身体の不調、癌の化学療法の吐き気や、膵臓癌の背中での痛みなど、挙げればきりがありません。西洋医学的な異常が見つからない場合でも、苦痛や不快感、ストレスを感じる患者さん、または薬剤使用に抵抗がある場合や、薬剤が副

作用で使えない場合にも、代替医療として用いられます。

■ 診療体制と実績

診療時間は、ペインクリニック外来が月火水金の午前、漢方外来が火水金の午前と月火水金の午後、鍼灸外来は水金の午前と月火水木金の午後、緩和外来は金曜午前を基本とし適宜相談にて対応しております。入院の癌性疼痛や慢性疼痛には、休日を含み、可能な限り連日の往診にて対応しています。

当科スタッフには、ペインクリニック専門医、麻酔指導医、集中治療専門医、救急専門医、緩和暫定指導医、漢方専門医、小児科専門医、労働衛生コンサルタント（保健衛生）が含まれます。鍼灸師は国家資格取得者です。2017年2月からは、臨床心理士の心理相談も行っています。

（受診のべ数 14292*、実数 775*。）

*）2017/4/1～2018/3/31での集計です。

■ 診療内容の特色と治療実績

1) ペインクリニック外来

各種方法を併用し、疼痛等の症状の緩和をはかります。薬物療法では、痛みの発生機序に応じ、神経経路の各部に作用する薬剤を使いわけています。

（受診のべ数 9747*、実数 523*。）（星状神経節ブロック 350*件、 何れかの硬膜外ブロック 496*件、 トリガーポイント注射 583*件、 何れかの三叉神経ブロック 90*件、 光線照射等 3758*件。）

2) 漢方外来

保険収載の医療用漢方エキス剤、煎じ生薬を用います。中国伝統医学や日本漢方、及び、現代医学的エビデンスに基づく考え方で、より確実かつ臨機応変に、刻々と変化する多様な症状に対応します。最新の情報を入手しつつ、養生的な生活指導、予防医学的見地なども取り入れ、全身状態を改善に導くよう努めます。数値化できにくい症状を、様々な評価ツールなどを用いて客観性を持たせ、治療の効果を判定し、その確実性を上げられるよう努力しています。診療は初診再診とも完全予約制とし、患者さんの全体像を把握できるよう、15～30分の長めの診察を行っています。大学病院における癌診療、また難治性疾患に対しての先進的医学治療への側方支援的サポートや、その限界に対しての補完医療としての役割をしっかりと担うことを目指しています。特に慢性疼痛や、がん治療などに対し、長期的に使用する薬剤の副作用を軽減することで、軽快に生活を送る

ことのできるサポートとしての漢方薬の位置づけなどについて研究しています。また、鍼灸といった伝統治療を漢方と融合させ、より満足度の高い補完医療を目指します。

（受診のべ数 約 2000、実数 約 200。）

3) 鍼灸外来の対象疾患・対象症状

「四診」を行います。「問診」で、症状や生活習慣、体質、体調などを聞き、「望診」で、全身状態、局所状態などを見、「聞診」では声音、呼吸などを聞き、「切診」では脈や体表に触れることで必要な情報を収集します。状態から経穴（ツボ）を選択し、鍼（ハリ）や灸を用いて施術します。症状と向き合うため、40～60分の診療となりますが、患者さん自身はほとんど横になっているだけです。安全性と有効性を考慮しつつ、伝統医学を現代西洋医学の現場に取り入れることで、統合的な治療とケアを目指しています。58%が、医師からの紹介での受診です。（受診のべ数 2154*、実数 126*。うち、入院中の実数 34*。）

4) 緩和外来

「生命を脅かす疾患に伴う問題」に直面する患者と家族が対象です。患者と家族を中心とするチーム医療を念頭に、関係各部門と連携します。他科入院事例の往診では、休日を含む連日の回診に努めます。

5) 慢性疼痛心理外来（2017年2月に開設）

臨床心理士が外来で心理面談をします。心理的アプローチによって、痛みと心身の変化をめざします。統合医学的アプローチの一環として開設されました。西洋医学、東洋医学に、心理学をも統合していく、全国でも類を見ない先駆的取り組みです。病棟の患者さんにも対応します。（受診のべ数 640*、実数 57*。）

■ 臨床研究等の実績

- ◇ 治験や市販後調査に積極的に参加しています。
- ◇ 慢性疼痛でのオピオイド使用の経験が豊富です。
- ◇ 痛みと鎮痛のメカニズムの研究を行っています。
- ◆ 文部科学省・課題解決型高度医療人養成プログラム（慢性の痛みの領域）；三重大学・鈴鹿医療科学大学合同「地域総活躍社会のための慢性疼痛医療者育成事業」（H28-33年度）にて、学生教育を行っています。多職種連携を、一つのキーワードとし、両大学の多様な職種の学部教育の早期に、このプログラムを組み込みます。卒後、地域の慢性疼痛医療において、チームのリーダーとなれる人材の育成を

目指します。

(<https://www.hosp.mie-u.ac.jp/chrpain/>)

- ◆ 「痛みのかえ方（南江堂：丸山一男 著）」に基づいて、診療を行っています。

 http://www.hosp.mie-u.ac.jp/section/shinryo/masui_painclinic/